

ニュースのことばは どう変わったか (上)

The Current of News-words in Japanese Broadcasting

山 本 明 夫

「ますます気忙しくなった」といわれる現代だが、ことばの簡素化や外来語の氾濫とともに、人間関係が実利一方・カサカサな状況になってきてはいないだろうか。

放送に使われることばも、いわゆる「体言止め」を多用するケースが多くなったようで、言い切り口調が我々の世代にはいささか気になる。

どのような意図で体言止めが使われるのか。また「放送が始まって以来、ニュースのことばがどのように検討され、変わってきたのか」を、『20世紀放送史』をはじめとする書物や、NHK放送博物館に残された資料、さらにアーカイブズの保管ビデオなどを頼りに探った。

キーワード：放送、ことば、変化、体言止め、やさしさ

目 次

- 1 ことばは時代とともに・・・だが
 - 2 ラジオの揺籃期 メモ：社団法人 日本放送協会の発足
 - 3 自主編集 全国の『ニュース』誕生 メモ：海外放送局と広告放送
 - 4 時局緊迫・同盟通信発足 メモ：2.26事件で初の“自主取材”
〃 実感放送に高い関心
 - 5 「放送ことば」の研究
 - 6 戦争状態の深刻化 メモ：戦争で気象情報が消えた！
 - 7 終戦と占領下放送 メモ：放送記者のレポート第1号
〃：難語 言いかえ集
- 以下 (下) として次号以降に掲載予定
- 8 特殊法人で再スタート、民放ラジオ開局 メモ：ローカル放送から (高知)
 - 9 テレビ放送の始まり メモ：テロップ表示の研究
 - 10 『ニュースセンター9時』から『ニュースステーション』へ メモ：久米 宏「番組の司会者」
〃：古舘伊知郎「われわれ先走り屋」
 - 11 “耳のことば” への回帰を

1 ことばは時代とともに・・・だが

「わたくしは、・・・」読者のうち、何人が日常的にこのことばを使っているのだろうか。

わたくし→わたし→わし。

・・・でございます→・・・です→・・・だ。

「ますます気忙しくなった」といわれる現代だが、ことばの簡素化とともに、人間関係まで実利一方・カサカサな状況になってきてはいないだろうか。

そういえば、放送では、生活情報番組や芸能番組だけでなく、ニュースや報道番組で、コメントのみならず記者の現場リポートまでにも、いわゆる「体言止め」を多用するケースが多くなったようで、私にはこの言い切り口調がいささか気になるようになってきた。

では、こうした体言止めのことばはどのような意図で使われるのだろうか。記者や制作者の考え方や思い入れはあろうが、私には、「押し付けがましいな」と感じられたり「尻切れトンボの原稿」のように聞こえたりして、耳につき始めると“どうにも困った”ことになる。困ったこととは、どうしてもこの体言止めのあとに「・・・です」と接尾語を頭の中で付け加える作業をしてしまうことだ。これが度々だとイライラ感が募ってくる次第だ。

長いこと現場でニュース原稿を操っていた私からすると、従来の形式を踏まえた原稿とどのように違った効果が期待できるのか、首を傾げたくなるようなものも多い。

こうした疑問から「放送が始まって以来、ニュースのことばがどのように検討され、変わってきたのか」を、『20世紀放送史』¹をはじめとする書物や、放送博物館に残された資料、さらにアーカイブズの保管ビデオなどを頼りに探った。

2 ラジオの揺籃期

1925年（大正14年）3月22日に東京・芝浦にあった東京高等工芸学校内につくられた東京放送局仮放送所から「仮放送」の名目で正式に放送の許可を得たラジオの電波が発射された。当時の資料によるとすでに初日のこの日から『ニュース』ということばが使われ、時間が割り当てられていた。²



『放送80年～それはラジオから始まった』より

当日の放送は、午前9時半から軍楽隊の演奏、10時から開局の式がマイクを通じて行なわれた。もちろん“生放送”である。³

『ニュース』は午前11時半からが初めての放送となった。原稿は、読売新聞社から提供されたもので、この日は午後1時半からの東京日日新聞社提供分、それに7時からの東京毎夕新聞社提供分の、合わせて3回放送された。

なお『天気予報』は、この日の放送が終了する直前の午後8時55分から放送されている。

『20世紀放送史』によると、これより先の3月1日から始められていた試験放送では、予定されていなかった『ニュース』が5日・8日・11日の3回放送されており、いずれも“火事”を伝えたものであった。特に5日に放送された「東京・深川の洲崎遊郭の大火」は発生時刻が夕刊の締め切りを過ぎており、この火事と芝・愛宕町の火事をあわせて午後8時7分から3分間『ニュース』として伝えた。これは、いわゆる“臨時ニュース”の第1号と言われている、と紹介されている。

“火事とけんかは江戸の華”、聴取者の関心も高かったであろう。

また、同書では、煙山二郎理事（当時・報知新聞企画部長兼務）の記録として、『新聞及新聞記者』を出典としている。「数千の遊女が赤い蹴出しを翻し、遁げ惑うさま、凄惨を極めた」との一文があると紹介している。聴取者は「赤い蹴出し」の表現に面食らったということで、煙山は「新聞の字面より耳から聞くことばが強い印象を与えたことがわかった」と記している。

ニュースの原稿は、関東大震災で発行休止をやむなくされたことを契機に、ラジオの日本への導入に当たって自ら放送局設立を計画した新聞各社や通信社などが提供することになった。

すなわち東京では「読売」「東京日日」「東京毎夕」「東京朝日」「都」「日本電報通信（電通）」「国民」「中外商業」「帝国通信（帝通）」「時事新報」「報知」の11社が無償で提供した。1日3社が持ち回りで、15分の原稿を作成し、放送局側がそれを取りに回ったという。そして、通信局の検閲を受けた後、書き換え・アドリブなしで放送された。

愛宕山に局舎が完成し、7月12日に「本放送」が始まった。3か月余りの実績を見て、速報競争での出遅れを危惧した新聞・通信各社からの申し入れで、『ニュース』は平日がそれまでの1日3回の放送が▲午後0時45分と▲午後7時10分からの2回に、また日曜日・祝日は1日2回の放送が▲午後7時10分からの1回に削減された。

大阪放送局では、「大阪朝日」と「大阪毎日」「帝国通信」が5月10日の試験放送から、また、6

¹ 『20世紀放送史』（上・下・年表）日本放送協会編集・発行 2001. 3. 22.

『々々（資料編）』NHK放送文化研究所編集・発行 2003. 3. 22.

² 「仮放送」や“正式に”などの表現になったのは、これより前に、新聞社や通信省、出版会社、その他の団体によって「無線電話」「実験放送」や「試験送信」などとして、放送としての電波が数多く発射されていた事情による。

³ 録音放送が最初に行われたのは1932年（昭和7年）11月22日で、前日にジュネーブで行われた国際連盟での佐藤尚武全権の演説をフィルム録音したものが現像されて放送に利用された。

月1日の仮放送以降は[京都日日]と[神戸]が加わって原稿を提供した。さらに、名古屋放送局では、[名古屋]と[新愛知]が原稿を提供したほか、[電通]から独自にニュースを購入した。

いずれの放送局も、それぞれが独自で『ニュース』を放送し、全国の『ニュース』の実現までには、なお時間を要した。

25年5月23日には、「北但馬地震」を[中外商業新報]の提供で13分間『ニュース速報』として放送したと記録されている。⁴

メモ -----

26年8月6日、東京・大阪・名古屋の3放送局がまとまって「社団法人 日本放送協会」を設立。役員人事で紛糾したが、20日に3放送局が解散して、正式に発足した。

----- メモ

1926年12月には、大正天皇の悪化したご容態を速報するため、宮内省と東京中央放送局を拠点に名古屋・大阪の各中央放送局とネットワークを構築するとともに、ニュース枠も増設した。

25日午前2時45分に宮内庁から「大正天皇崩御」の連絡を受けた3中央放送局は、9分後の54分からそれぞれの放送部長が宮内省の発表を伝えた。関連ニュースは14日から25日までの12日間に、東京で157回、大阪で87回、名古屋で189回が記録されている。

1928年（昭和3年）11月27日の『昭和天皇・皇后即位式からの還御中継放送』の台本と、実際に放送されたであろう手直しコメントが、NHK放送博物館に保存されている。



ただいま、お召し列車、東京駅構内に進んで参りました。日に照り映えて銀の光のごときレールの上をば、さるるように音もなく第3番目のプラットフォーム第6番線に、お着きになりました。・・・

（台本＝お召し列車は、ただいま東京駅構内に進んで参りました。まるでさるるように音もなく、ただいま第3番目のプラットフォームの第6番線に、お着きになりました）・・・

ただいま鹵簿（ろぼ）の前駆は、ちょうどマイクロフォンを備え付けてございます丸の内ビルディング前を進んでおります。・・・

（台本＝マイクロフォンは駅前広場にある丸の内ビルディングの一隅に備え付けてございます。ただいま鹵簿の先頭は、ちょうどマイクロフォンを備え付けて御座いまする前をお通りになります。）……

###

⁴ 『20世紀放送史（上）』pp53

昭和天皇・皇后両陛下の20日間余りにわたった即位の大礼に関する放送は、連日、東京・京都など関係各地から中継で伝えられたようだが、当日の天候や現場の状況をより正確に表現するために台本を何度も書き換えた跡が残っている。ラジオ放送が始まって間がないこの頃にすでに“電波に乗せるその時まで表現を練り上げよう”とする放送人としての魂があったことが資料からうかがえる。

また、即位の大礼に間に合わせるため、放送協会の組織が一丸となって取り組んだ結果、諸行事が始まる前日の11月5日には、東京と各地を結ぶ有線の中継線や無線中継による“全国放送網”が出来上がっている。

3 自主編集 全国の『ニュース』誕生

1930年11月1日午後0時40分から、『ニュース』の全国放送が始まった。

全国中継網の完成とともに『気象通報』として「全国天気概況」や「漁業気象」などが伝えられていたが、『ニュース』は素材の収集力などが貧弱だったため、各放送局の“ローカル”扱いが続いていた。

この『ニュース』の全国放送は、同時に、放送局による“自主編集ニュース”の幕開けでもあった。

名古屋と広島では提供される新聞・通信社のニュース以外に、電通からニュースを購入して自主編集でニュースを扱っていたが、東京・大阪・熊本・仙台・札幌は依然として提供ニュースに頼っていた。

東京では、新聞・通信各社との折衝の結果、放送するにあたっては通信社名をつけるなどいくつかの付帯事項はあったものの、新聞連合社（連合）と日本電報通信社（電通）の2社のニュース購入契約が結ばれ、11月1日から、『ニュース』の全国放送が始まった。

これを機会に、▲午後0時40分（10分間）、▲4時（5分間）、▲7時（17分間）、▲9時40分（5分間）の1日4回に倍増した。ちなみに、日曜日・祝日は2回に増えた。

放送局が自主編集したニュースでは、通信社の原稿について、その出所に放送局が事実確認を行なうことを可能にしており、“自主性”や“正確性”を確保する姿勢を示している。⁵

メモ -----

いわゆる植民地政策がとられた朝鮮に朝鮮放送協会、台湾に台湾放送協会、旧満州には満州電信電話会社（*）、樺太（現 サハリン）には豊原放送局、さらにパラオにはパラオ放送局が作られ日本

⁵ 『20世紀放送史（上）』pp55

放送協会と連携して放送が実施された。(*)

国内では、1951年の民間放送の設立までは「広告放送」は許可されていなかったが、これらの地域のいくつかでは、一時「広告放送」が行なわれた。

台湾では、32年6月からほぼ半年間「〇〇さん提供の××の放送をいたします」という間接広告のかたちで実施された。しかし、聴取者の支持が拡がるとともに新聞広告の出稿減少を心配した新聞界からの圧力が高まって中止にいたった。

一方、旧満州では36年から40年まで直接広告と間接広告で実施されたが、時局が緊迫の度を増したことから自粛せざるを得なくなった。

(*) 満州電信電話会社＝電信、電話、放送を包括した国策会社

(*) 文末に各放送局一覧一資料①

----- メモ

4 時局緊迫・同盟通信発足

1931年9月18日夜に「満州事変」が起き、19日朝『ラヂオ体操』のあとに『臨時ニュース』を設定して速報したが、政府は、軍事機密保護を盾に次々に報道規制を強化した。基本的には軍発表以外の報道が禁止された。

32年5月には5.15事件が起きたが、3時間後には『臨時ニュース』で一報を伝えた。

----- メモ

4年後の1936年に起きた「2.26事件」では、事件後半日余りにわたって報道が差し止められ、国民が概要を知ったのは陸軍省の発表を受けて行なわれた午後8時35分からの『臨時ニュース』であった。もちろん新聞も号外の発行は止められていた。

徐々に、しかし確実に、言論規制・統制が進んでいたことをうかがわせている。この事件では、都内の出来事であり新聞各社が襲われたことから放送協会では報道部員を中心に情勢の取材が行なわれたが、これは放送史上初めての事実上の“自主取材”とも言われている。

----- メモ



←警視庁中庭での部隊（新詳日本史・浜島書店より）

1936年（昭和11年）に起きた2.26事件では、東京通信局監督課無線系のモニター採録によると、事件翌日の午前6時半と7時50分の『臨時ニュース』の冒頭は、次のようなものだった。

今暁2時50分、帝都に戒厳令が布告されました。

政府は帝都治安維持の為、戒厳令を施行することとなり、枢密院の諮詢を経て、今暁0時半、裁

可あらせられましたので、午前2時50分を期して、帝都に戒厳令が布告されました。戒厳司令官には東京警備司令官 香椎浩平中將を、戒厳司令部参謀長に警備司令部参謀長 安井藤治少將が任命されました。……

###

事件解決に向けて大きく動いた29日には、次のように放送している。

午前11時の『臨時ニュース』

香椎司令官の慈父の愛に、反乱軍の兵が続々帰順してをります。

先ほど放送しました香椎戒厳司令官の、反乱軍の兵に告ぐる告諭(*)は、まことに慈父の愛に充ちあふれ、聞く者悉くを涙に誘ふ感激の文字に綴られたものでありましたので、今一度復唱致します。即ち次のようなものでありました。……

###

(*) 戒厳司令官の告諭＝午前8時48分、戒厳司令部に仮設された放送室から東京ローカルで

放送された戒厳司令部発表の“兵に告ぐ”を指す。中村 茂アナウンサーが読み上げた

午後4時『ニュース』

事態は全く鎮定しました。

戒厳司令部では、先程も申上げました通り、午後3時、次の様に発表いたしました。「反乱部隊は、午後2時頃を以て、其の全部の帰順を終り、ここに全く鎮定をみるに至れり」と発表しました。

又、午後3時20分、避難された方々は、憲兵・警察官の指示を受け、自宅に御帰り下さいと発表し、環状線内の交通整理制限は、午後4時10分以降、解除致します、と発表しました。

鉄道は、正午から平常に復しました。……

###

国内メディアの“情報の一元化”を図りたい政府や関東軍の意向を受けて、32年12月に旧満州に満州国通信社（国通）が設立され、35年12月には日刊の新聞各社と日本放送協会の出資で、社団法人同盟通信社が設立された。36年正月から連合通信社の業務を引き継ぎ、電通の報道部門である通信部も合流して、実質的なナショナルフラッグの通信社が発足した。同盟の広告部門も半年後に電通に移管され、電通は広告業の専業体制となり国内におけるメディアの業務の分割が終わった。⁶

----- メモ

この頃はアナウンサーや制作要員が取材にあたることが多く、ロサンゼルスオリンピックや、初めて録音放送が行なわれたジュネーブでの国際連盟総会の様子、室戸台風の被災状況などは、実感放送(*)を中心にして伝えられ、聴取者の高い関心を呼んだ。

(*) 実感放送＝1932年に開かれたロサンゼルスオリンピックで、マイクなどの放送装置を競技会場に入れることができなかったことから、実況放送にいかにか近づけるかで知恵を絞った。そ

⁶ 『20世紀放送史（上）』pp136

のひとつが実感放送である。取材者（アナウンサー）が見たことや取材した事実をメモにして、別の場所に設けたマイクの前に立ち、いかにも中継放送であるかのようにレポートを行なった

----- メモ

5 【放送ことば】の研究

＜放送のことばの検討＞

放送用語としての“ことば研究”は、34年1月に「放送用語並びに発音改善調査委員会」（現在、「放送用語委員会」として継続）を発足させて本格化した。

これには、東京・大阪・名古屋の3放送局時代にはアナウンサーをはじめとする職員の採用が各局で行われていたため、地方なまりが抜け切れないことや、組織的な研修が行われなかったなどの実態があった。また、明治の教育や制度などを通じて“書きことば”が教養を示す基準とされていたこと。さらに文明開化以降の〔演説〕スタイルの普及などから、マイクの前に立っても漢文調の〔文語体〕が多用されたという背景があった。このことは、ラジオ放送が発足した段階で比較的早くから指摘されていたところであったが、よるべき“話しことば”の標準を決めかねたことから早急な対応がとれなかった。

1935年3月のニュース原稿を紹介すると⁷

昨年11月14日、川越市で開催の政友会関東大会に臨席した鈴木政友会総裁を邀撃（ようげき）しやうとして果さず、決行直前の13日午前2時、関係地署員の手によって疾風迅雷的に逮捕され5・15血盟団事件につぐ陰謀として世人の耳目を聳動させました所謂『救国埼玉青年挺身隊』の一味30余名中の、（人名略）7名は、殺人予備罪として起訴され、去る31日予審を終結しましたが、けふ午前9時愈々その第1回公判が浦和地方裁判所陪審法廷に於て、島津裁判長、永井検事、鈴木、本多両陪席判事、林弁護人係りで開廷されました。 ## #

様々な要素がひとつの文章で表されたため、主語の位置が極端に後ろにあったり、文章途中で時制が3回も変わっている。しかも、中段で省略した部分には7人の名前が延々と書かれている。

難文と言うよりも、聴取者の理解を超える悪文となっている。この文章を目にするにつけても“ことば研究”が急がれた理由が透けて見える。

⁷ 『放送用語論』NHK総合放送文化研究所（1975. 3）pp264 第4章 報道文章論（稲垣文男）

委員会は1年後の35年3月に「放送用語の調査に関する一般方針」を発表するに至った。

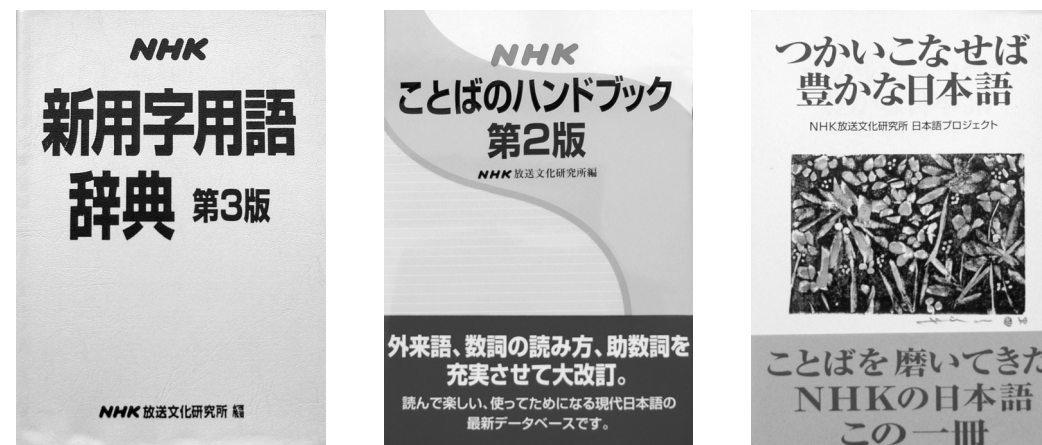
一般方針では、

- 美しい語感に富む“耳のことば”を建設し、放送効果の充実をはかる
 - 放送用語は、全国中継アナウンス用語（共通用語）を主体とする
 - 共通用語は、現代の国語の大勢に順応して大体、帝都の教養ある社会層において普通に用ひられる語彙・語法・発音・アクセント（イントネーションを含む）を基本とする
- とされた。

この一般方針の基本の精神は、現在も改訂・刊行が続けられている『日本語発音アクセント辞典』や『新用字用語辞典』『ことばのハンドブック』などに引き継がれている。

委員会は5年間でほぼ基本の調査とまとめを終了して、28種類の刊行物としてその成果を公表した。（*）

（*）文末に刊行物名の一部を列記—資料②



＜ニュースの用語検討＞

また、ニュース用語については、引き続き調査研究を行う必要があるとして、40年8月に「ニュース用語調査委員会」が設置された。

10月には『放送ニュース編輯便覧』がまとめられた。⁸ それには、

- ラジオニュースのスタイル原則
- 文語調を口語調になおすこと

⁸ 『放送用語研究 I 放送のことばのめざすもの』NHK総合放送文化研究所編（1968. 3）pp133 放送用語研究史

- 漢文脈ならびに欧文直訳体を避けること
 - 主語を文のはじめに出すこと
 - 段落を多くすること
 - 名詞止めを少なくすること
 - 「て・に・を・は」の省略をやめること
 - むずかしい漢語の書きかえ
- などが解説されている。

こうして、「…です。」「…ます。」を中心に、漢字表現を“話しことば”に置き換えた「共通用語」の普及が本格化していった。

6 戦争状態の深刻化

2.26事件から1年半後の1937年7月7日夜に起きた蘆溝橋事件でも、翌日の8日の午後0時40分からの定時ニュースまで原稿が留め置かれる事態となった。(*)事件の発生の第一報は、同盟通信北京支局から上海支社を経て8日の朝には東京に届き、放送協会の報道部の知るところとなったが、通信当局から『臨時ニュース』を差し止められた。このため国民は、正午過ぎの定時ニュースでようやく事件の発生を知ることが出来た。政府は国民の“無用の刺激”を回避するとして10日まで『臨時ニュース』の放送を1度も許可しなかった。日中両国が停戦協定に調印した11日になってようやく許可し、午前7時9分からの『臨時ニュース』をはじめこの日だけで9回放送されたという記録が残されている。

(*) 当時は内閣官房(内務省)と陸軍省、海軍省などが個別にメディアへの関与を行っていた

放送博物館にある7月9日のニュース原稿の綴りには、この日の未明に出稿された北平(北京)発の同盟通信原稿と放送用原稿が保存されているが、午前8時30分から『臨時ニュース』として準備されたものには、「依命中止」の判が押され「放送出来ず」と記入されている。また、この同盟通信の原稿の欄外には「陸軍省新聞班より、事実なるも支那側が撤退の約束を守るかどうかかわからないから、やらないでくれとのこと(8時半現在)」との添え書きがされている。⁹

午後0時40分からの定時『ニュース』は次のように伝えている。

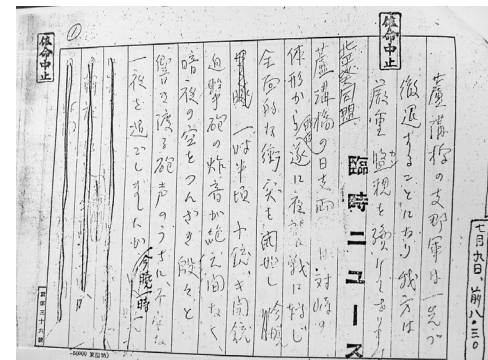
昨夜、再び戦闘状態に入った蘆溝橋事件は、けさ、支那軍が撤退することになり、ひとまず戦闘は中止されたそうでありませう。北平発同盟。蘆溝橋事件は、支那側が、不法にも、昨日午後に至つ

て、撤兵ならびに武装解除の約束を守らず、遂に、再び戦いを交へるに至り、両軍対峙の体形から、昨夜は夜襲戦となり、小銃、機関銃、迫撃砲の炸裂する音が、暗夜の空をつんざいて殷々と響き、不安な一夜を過ごしましたが、冀察側代表(*)張允榮氏は、けふ午前1時、松井特務機関長を訪ね、約2時間にわたり、蘆溝橋事件解決について折衝を行ないました。

その結果、支那側は、おそくも午前9時までには、永定河～北平のすぐ傍を流れている河です～

この永定河の右岸に撤退することになり、午前5時、双方第一線部隊に対し、射撃停止の命令を下しました。これで、一昼夜にわたる戦闘状態は、ひとまず停止されたと言はれて居ります。支那軍の撤退監視のため、日本軍側から中島冀察軍事顧問、支那側から冀察外交委員会専員 林耕宇氏が、現場に出張しました。尚、張允榮氏の松井特務機関長訪問に先立ち、天津市長 張自忠氏も停戦について斡旋し、交渉をまとめる事につとめたものであります。 ###

(*) 冀=キ、こいねがう)



「依命中止」のスタンプが見える原稿(放送博物館所蔵)

ちなみに、この時間の『ニュース』のオーダーは、

① 溝橋事件	戦闘中止	北平発同盟
〃	敵の不法射撃を撃退	〃
〃	支那側も撤退準備	〃
〃	北平市長も遺憾の意	〃
〃	政府 けさ閣議	同盟
② 株式市場は平穩		〃
③ 社会保健省の予算問題		〃
④ ソ連のカッター引き揚げ問題で外相会談		モスクワ発同盟
⑤ 行方不明のイヤハート機 絶望		ホノルル発同盟
⑥ 通貨問題で米支共同声明		ワシントン発同盟
⑦ NY綿花市場 急騰		ニューヨーク発同盟
⑧ 米 赤字克服で予算削減		ワシントン発同盟
⑨ スペイン内乱不干渉委員会		ロンドン発同盟
⑩ 英露海軍条約調印延期		〃
		以上 全国
① 市営バス 新宿一浅草線	あすから運転	同盟

⁹ 放送博物館資料『ニュース原稿綴り』

②立川の連隊 耐暑行軍に出発 //

以上 ローカル(*)

(*)すでにこの時点で“ローカル”の用語が使われていたことがわかる
綴りには「ボツ原稿(任意取止)」として、次の2本が添えられている。

①(タイトル)大宮東電発電所 焼く

きのふ午後10時ごろ、静岡県富士郡大宮町字泉 東京電灯発電所でモーターの過熱から突然発火。内部を全焼しました。損害約2万5000円ですが、所員には別状なく、同11時ごろ消し止めました。 ###

②(タイトル)トラック火事

けさ午前7時ごろ、京橋区木挽町8丁目4番地、運送業〇〇〇方運転手×××君(30)がトラックを運転 疾走中、同区西八丁堀3丁目7番地先で突然エンジンから火を発生、運転台に燃え移り、急報により付近の消防自動車駆けつけましたが、幸ひ負傷者なく、まもなく消し止めました。損害は200円位でした。 ###

しかし、戦線の拡大は止まず、政府は「北支事変」から「支那事変」へ呼称を変えた。以後、8年間にわたる日中戦争・太平洋戦争の始まりである。

8月21日からは、午後の4回の『ニュース』に加えて、通常の放送が終了した後に『今日のニュース』を15分間放送して、昼間の電気供給がない地域や仕事に出ている農林業・水産業の人びとに、1日のまとめをわかりやすく編集して伝えた。

その後は、国家総動員法や軍機保護法などによって“報道管制”は強化の一途をたどった。

そして、1939年7月には「時局放送企画協議会」が設置され、これに逓信省電務局無線課長や内閣情報部情報官が参与として加わったため番組の企画・制作は、事実上情報部の指導下に組み込まれた。

翌40年12月6日には情報部に外務省情報部や陸海軍の情報関連の業務、それに内務省検閲業務の一部が移管された内閣直属の「情報局」が設置された。ただ、戦局に関しては陸海軍の報道部が担当した。

太平洋戦争が始まった41年12月8日からは、気象管制が敷かれ『天気予報』と『気象通報』が消えた。また、教育・教養番組やスポーツ・舞台などの分野の複数受信の機会を確保するため東京・大阪・名古屋で放送が行なわれて“都市放送”とも呼ばれていた第2放送も休止された。

さらに戦時色が深まり、42年4月からアナウンサーが“放送員”と呼び名を改められ、翌年1月に米英の音楽作品の約1000



情報局が置かれた帝国劇場 (『放送80年』NHK-SCより)

曲が放送できなくなり、4月には『ニュース』が『報道』、午後10時の『今日の戦況とニュース』が『今日の報道』に変わった。¹⁰

メモ -----

戦争中、気象情報として記録されているのは、42年8月に長崎県から中国地方を通過した「台風18号(周防灘台風)」で9回にわたって暴風警報を伝えたほか、45年4月22日に新潟放送局が地方気象台の要請で翌朝に予想される「霜害への警戒」を呼びかける放送を午後5時の『ニュース』で伝えたことがある。いまから思えば、国民は毎日の天気について、どのような対応をしていたのか、想像もつかない時代だった。

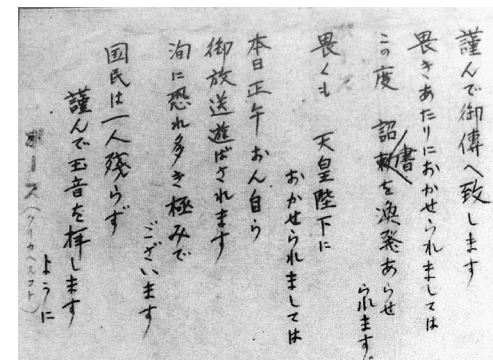
終戦後は、8月22日の正午の『ニュース』の後3年8か月ぶりに『天気予報』が復活した。全国向けの『気象通報』が復活するのは12月1日からである。¹¹

----- メモ

7 終戦と占領下放送

1945年8月15日の正午に、無事、昭和天皇の「終戦の詔」の放送を終えた日本放送協会だったが、その後の数日間、詔書を戦争相手国などの言語に翻訳して、海外に向けて放送した。

ニュース原稿によると、玉音放送の前触れは次のようなものだった。



玉音放送の前触れニュース原稿(放送博物館所蔵)

15日午前7時21分『全中ニュース』¹²

謹んで、御伝へ致します。

畏きあたりにおかせられますは、この度、詔書を渙発あらせられます。(間)

畏くも、天皇陛下におかせられますは、本日正午、おん自ら御放送遊ばされます。洵に恐れ多き極みでございます。

国民は1人残らず、謹んで玉音を拝しますように。(間)

なほ、昼間、送電のない地方にも、正午の報

¹⁰ 『20世紀放送史(上)』pp163 『20世紀放送史』pp143

¹¹ 『20世紀放送史(上)』pp158

¹² 『20世紀放送史(資料)』pp146

道の時間には、特別に送電致します。

又、官公署、事務所、工場、停車場、郵便局などにおきましては、手持ち受信機を出来るだけ活用して、国民もれなく厳肅なる態度で、かしこき御言葉を拝し得ますよう御手配願ひます。

有難き御放送は、正午でございます。 ###

そして、この日の午後5時の『ニュース』は、¹³

畏くも天皇陛下に於かせられましては、萬世の為に太平を開かんと思召され、きのふ政府をして、米英、支、蘇4国に対し、ポツダム宣言を受諾する旨、通告せしめられました。(この後、敗戦にいたる経緯をまとめて伝えた) ###

ニュース項目は、残された資料を見る限りでは

- ① 玉音放送に関する本記と、敗戦にいたる経緯のまとめ
- ② 日本政治会の「聖断は遂に下り、大日本帝国の平和的再建設に邁進せんことを誓ふ」との声明
- ③ 文部大臣 橋田邦彦氏、東京帝大教授 紀平正美博士の談話
- ④ 政府 きのふの閣議で「戦後対策委員会」の設置決定
- ⑤ 夜から明け方にかけて関東以北に約250機のB29が来襲 被害出る
- ⑥ 広島原爆犠牲者 現地の首脳者を含め相当数
- ⑦ 司法省 高松の控訴院新設に伴う人事異動発令
- ⑧ ソビエト政府が日本の戦争終結回答を受理 スtockホルム発 同盟=至急報
- ⑨ 米大統領が日本政府に戦闘停止に関する通告 リスボン発 同盟=至急報
- ⑩ 米戦時動員および再転換局のスナイダー長官が「終戦に伴い国内を全般的に再調整するための具体策」を指示へ リスボン発 同盟
- ⑪ スターリン議長が重慶代表と長時間会談 スtockホルム発 同盟
- ⑫ アメリカの新聞『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』が原子爆弾に関して、「人類史にとって運命的であり、歴史を根本から覆したもので、国際政局と戦争の帰趨に、深刻な影響を与えた」と報道した リスボン発 同盟

植民地などに建設や設立された海外の放送局は、終戦を受けて接収されたり破壊されたりした。(*)

(*) 文末に一覧一資料①

連合国最高司令官総司令部(GHQ)は、9月2日の降伏文書調印式当日に、指令1号と2号を出したが、この中で政府に対して「放送を含む一切の無線通信施設を現状のまま保全し運用せよ」

とした。

しかし、放送協会が行なってきた外国語による海外放送は休止することとなった。

GHQは民主主義と平和主義の定着を基本施策においたが、報道については厳しい検閲を行なった。

先にも述べたように、節目節目では独自の情報取材を行っていた協会だが、組織的に「記者制度」をとったのは1945年11月の臨時帝国議会からである。

同盟通信社が解散して、共同通信社と時事通信社に分割され、数人の記者が協会に移ってきた。彼らと報道部ニュース係員で取材などを担当した。

翌46年4月には公募によって400人の中から男性22人、女性4人が採用された。彼らが「放送記者1期生」である。12月にも2期生の採用が行なわれた。¹⁴



震災火災後の福井市内
(福井市震災復興誌より)

メモ -----

放送記者のリポート1号とされているのは、48年6月28日夕方発生した「福井地震」の現地の様子を、翌29日に福井市内に入った大阪局の山下明記者が午後、雑感原稿の後で伝えたものだ。

「たった今余震があった」「福井に入る途中で見た光景だが、1階はつぶれているが2階が無事な家があった」などとアドリブで報告したと伝えられている。

----- メモ

ニュースや番組への検閲は、47年5月から事後検閲に移され、徐々にゆるめられていった。そして、49年10月8日に一切の検閲は廃止された。これを受けて、12月1日に「日本放送協会放送準則」を定め、以後の番組・ニュース作りの基準とされた。これに先立って48年5月に、考査室を設置して自己検証体制が整えられている。

50年6月に朝鮮戦争が起きるとGHQの検閲がいったん再開されたが、その後の電波3法の制定や対日講和条約の調印によって、検閲の軛(くびき)から解放された。

1945年6月に戦局の悪化のため業務を中止した「ニュース用語調査委員会」は、翌46年4月には

¹³ 放送博物館資料『8月15日ニュース綴り』

¹⁴ 『20世紀放送史(上)』pp261

「用語研究会」として再発足している。『ニュース』や『解説』をはじめ各種の番組の“ことば”について審議している。

1948年4月から8月にかけて『ニュース』に使われた動詞を中心に、調査と分析をした放送文化研究所用語班の鈴木 明研究員は当時のニュース原稿について、

○ニュースことばが、まだまだ書きことばに強く影響されていると思われる。

○研究会で不適当と言いかえに努力している漢語動詞が相当に使われている。

（例）立候補する、合理化する、関する、確保する、検討する、開始する…

などを指摘し、やさしく言いかえられるのではないかとして、

（例）会談する→話し合う、打開する→切り開く、言及する→取り上げる…

と書いている。¹⁵

また、7月31日のニュース原稿についての審議資料には、

○主語を先頭に置くように。

○時制を考えるように。

○価値判断を含むことばは避けたい。

などの書き込みメモが見られる。

書き込みがされた自主取材と見られる49年7月31日の放送原稿を例示すると

（ ）内が書き込みの部分¹⁶

午前6時の『全中ニュース』

岡山県の三井造船玉野製作所では、先頃からデンマークの会社の注文で、5170トンの大型貨物船をつくっていましたが、このほど（2か所の時制の書き換えを指摘）見事に（価値判断ではないかとの疑問）完成し、きのう、連合国代表をはじめ多数の関係者が参列の下に（→参列して、と言い換え）、盛大な（価値判断の可能性）進水式をとり行ないました（→行ないました、と言い換え）。

これは大型船としては、我が国最初のものです。 ###

午後7時の『全中ニュース』

国鉄の人員整理を前に控えたころの民主自由党は、行政整理をきっかけに、共産党と決戦を交える覚悟を固めていましたが、国鉄の人員整理は、意外に滞りなく片づきました。しかし、民主自由

党が反共戦線の統一を図ることにより、相当長い期間にわたって、政界での主導権を握ろうというねらいを妨げようとする動きは、なおしつこく（価値判断ではないか）企てられており、中でも、民主党野党派の苦米地氏は民主自由党が近く政策的に行き詰まるとの見とおしの下に、拳国連立政権を提唱する意向を持っていると伝えられています。 ###

この頃には、「用語研究会」で、ニュースのことばや番組台本の検討が、頻繁かつ熱心に検討されている様子が、残された資料から伝わってくる。それにしても、政局の2文節目は長過ぎるようである。

1949年7月の放送原稿に対する「用語研究会」の検討を示したが、じつは、これらの指摘は、1949年8月に発足した「ニュース用語調査委員会」が2か月後の10月に刊行した『放送ニュース編輯便覧』にすでに明示されている事柄ばかりである。すなわち便覧では、放送文章作成の原則として、

○文語調を口語調になおすこと。

○漢文脈や欧文直訳体を避けること。

○主語を文のはじめに出すこと。

○段落を多くすること。

○適当な補足または解説の語句を添えること。

○名詞止めを少なくすること。

○助詞（て・に・を・は）を略さないこと。

○むずかしい漢語は書き換える。

○外来語や外国語の乱用を避ける。

などを主な柱としている。これらは、現代でもなお、心がけるべき事柄ばかりである。

メモ -----

むずかしい漢語などの言いかえ、書きかえについては、1952年6月に、『難語 言いかえ集』がまとめられている。

また、文章の長さについては1970年の『放送文化研究年報15集』で菅野 謙研究員が67年度のテレビニュースを分析し、1文節で平均74字という結果を得ている。そして、文芸作家では太宰 治が75字でほぼ同等であり、新聞では政治関連記事が78字と多いが、社会関連記事は55字、投書欄は49字などとなっており、テレビニュースが「正確・簡潔・わかりよい」を目指しているにもかかわらず、原稿の整理が追いついていないことを裏付けていると指摘した。

----- メモ

この後、NHKは“電波3法”施行にともない「社団法人」から現在の「特殊法人」に改組される。また、民間ラジオ放送の道が開かれ51年9月1日に大阪の新日本放送と名古屋の中部日本放

¹⁵ 『放送文化研究所月報』7号（1948. 5）『 々 』10号（1948. 8）

¹⁶ 放送博物館資料『149回用語研究会資料』

送が開局し、NHKと民放の共存体制がスタートした。（「上」編終了）

注

歴史的イベントでの用語や仮名使い、それに地名などは、資料を原本とし原則として当時のものをそのまま使用した。漢字については、原則として常用漢字に置き換えた。敬称は略した。

資料①

朝鮮半島や中国（旧満州を含む）、台湾その他の日本軍占領地域での、放送局の開設の概略は、次のようなものである。

（注：コールサインの一部は部外民間資料による）

- 1927年2月16日 京城（現・ソウル）放送局（J O D K）本放送開始
- 1928年1月1日 哈爾浜公播電台（M T F Y）本放送開始
- 10月 瀋陽（旧・奉天）公播電台（M T B Y）本放送開始
- 12月22日 台湾総督府が台北放送局（J F A K）開局
- 1929年2月1日 社団法人台湾放送協会 設立
- 1932年4月7日 京城放送局を朝鮮放送協会に改組
- 1933年9月1日 満州電電発足（大連（J Q A K）、奉天、新京（現・長春、M T C Y）、哈爾浜の4局を受け継ぐ）
- 1936年11月15日 朝鮮放送協会が平壤（現・ピョンヤン）放送局（J B B K）を開局
- 1939年4月10日 東亜放送協議会結成（日本、朝鮮、台湾、満州電電が加盟、のちに華北などが加わって7団体となる）
- 1941年3月15日 日本の占領軍が、中国放送協会（中国広播事業建設協会）を設立（南京中央広播電台、上海、漢口、杭州、蘇州、寧波ほかを吸収）
- 9月24日 南洋諸島パラオに初の短波放送局開設（J R A K）
- 12月26日 豊原（現・ユジノサハリンスク）放送局（J D A K）樺太（現・サハリン）に開局
- 1942年1月より マニラ、香港、シンガポールほかに放送局開局
- 1944年4月以降 戦局の悪化で、海外放送局が相次いで閉局
- 1945年8月19日 ソ連軍が新京放送局を接收
- 9月1日 東亜放送廃止
- 4日 海外放送の外国語放送停止
- 5日 中国・延安の新華人民放送局 本放送開始

- 16日 米軍が京城放送局を接收
- 23日 A F R S（米軍部放送組織＝進駐軍放送）放送開始 ～ 53年3月15日廃止

資料②

- 1935年に委員会から出された冊子ならびに刊行物（一部）
 - 『宮廷敬語』（4月）
 - 『難読姓氏（第1集）』（8月）
 - 『ニュースの文体及び語法』
 - 『アナウンサー用語集』
 - 『雅楽語彙』（8月）
 - 『謡曲狂言曲名一覧』（8月）
 - 『難読駅名』（10月）
- その後40年までの出版物（一部）
 - 『演劇外題要覧』（1936年11月）
 - 『カ行鼻濁音の発音例』（1936年）
 - 『外国地名人名表』（1937年3月）
 - 『神宮及官国幣社一覧』（1937年8月）
 - 『難読仏教語彙』（1937年9月）
 - 『難読姓氏（第2集）』（1938年）
 - 『放送用語調査委員会決定語彙記録』（1939年4月）
 - 『同字異読語彙』（1939年3月）
 - 『紀元二千六百年祝典用語』（1940年1月）
- その後「ニュース用語調査委員会」が45年までにまとめたもの（一部）
 - 『放送ニュース編輯一覧』（1940年10月）
 - 『アナウンス読本』（1940年10月）
 - 『放送用語備要集成』3冊（1940年11月～）
 - 『同音語類音語』（1941年7月）
 - 『日本語アクセント辞典（旧版）』（1943年）

